

「気になる」子どもの運動発達と有能感に関する研究 3 — 自己評価と有能感の関連に着目して —

○ 本郷一夫 (東北大学)
松本恵美 (東北大学大学院)
武田 藍 # (東北大学)
碓井百合 # (宮城県サッカー協会)

進藤将敏 (東北大学大学院)
大淵守正 # (東北大学)
碓井貞治 # (宮城県サッカー協会)

【問題と目的】 一般に、「気になる」子どもは、運動調整の難しさに加え、運動に対する苦手意識をもちやすいことが指摘されている。そのような観点から、研究 3 では自己評価と有能感との関連を明らかにすることを目的とした。

【方 法】 1. 対象児：保育所の 5 歳児クラスの子ども 24 名 (男児 14 名, 女児 10 名)。

2. 期間：サッカーの巡回指導は年 4 回約 1 時間実施された。ここでは 2013 年 11 月および 2014 年 3 月のデータを報告する。

3. プログラム：サッカーの巡回指導は 3 つの運動課題と自己評価から構成された。①ビーズリレー：ジグザグに配置されたコーンを走り、10m 先でビーズをひもに 10 個通し、戻ってくるまでの所要時間を測定した。②シュート練習：ゴールに向かってシュートの練習を行った。③ゲーム：ボールを使った試合を 2 分間 2 試合行った。④自己評価：4 項目 (サッカー教室全体・ビーズリレー・シュート練習・ゲーム) の各々について、上手にできたかと思うかを「できなかった (1)」から「よくできた (4)」までの 4 段階で評定するように求めた。⑤有能感の評定：2014 年 3 月には自己評価に加え、有能感の 3 項目 (運動・友達との遊び・勉強) について、「得意じゃない (1)」から「とても得意 (4)」で評定するように求めた。

4. 自己評価および有能感の測定：KEEPPAD JAPAN のクリッカー用アプリケーション (Turning Point 2008) を用いて、各々の参加児にクリッカーの該当ボタン (1~4) を操作させて、評定を行った。

【結 果】 1. 運動得点：図 1 にはビーズリレーにおける、ゴールまでの平均所要時間の変化を示した。t 検定の結果、有意差は見られなかった。

2. 自己評価得点：図 2 には自己評価項目の平均を示した。項目全体の得点を比較したところ、11 月よりも 3 月の方が有意に低かった ($t(17) = 2.54$,

$p < .05$)。項目ごとの比較では、ビーズとゲームが 11 月よりも 3 月の得点が有意に低かった (ビーズ： $t(17) = 2.61, p < .05$ ；ゲーム： $t(17) = 2.37, p < .05$)。

3. 自己評価と有能感の関連：自己評価と有能感の項目間の相関を求めた。その結果、「ゲームの自己評価」と「運動の有能感」($r = .510$)、「サッカー教室全体の自己評価」と「友だちの有能感」($r = .515$)、「サッカー教室全体の自己評価」と「勉強の有能感」($r = .474$) との間において有意な相関が見られた (いずれも $p < .05$)。

【考 察】 今回報告した結果から、運動発達、とりわけ運動協応の発達は「気になる」子どもの特徴を捉えるための重要な指標となり得ると考えられる。また、自己評価と有能感との関連から、運動発達の遅れが有能感・自尊感情の低下や対人関係の持ち方に影響することが示唆される。

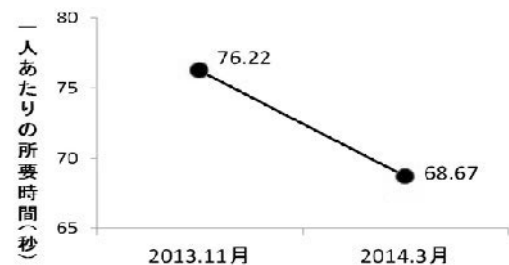


図1 ビーズリレーの所要時間

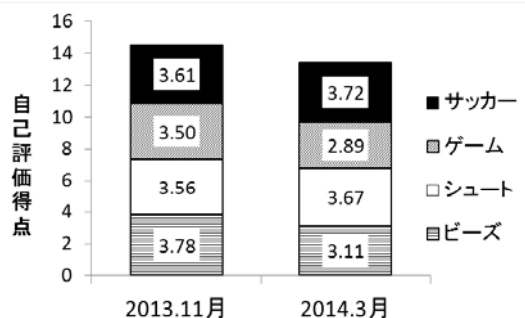


図2 運動の自己評価